

75 歳、交通誘導員 柏 耕一
まだまだ引退できません。

・前作と重なっている内容が多く、がっかり。

もう後期高齢者（75 歳以上）になってしまったのか、と心の中でつぶやくことがある。交通誘導員として、この齢で肉体労働はつらい。しかし食べるためには、つべこべ言っていられない。

交通誘導員になって考えさせられたのは、80 代の方と仕事をしたことである。なかでも 85 歳、84 歳が最高齢だった。前者はそれこそよぼよぼだったが、四十数年にわたり警備員としてのキャリアを重ね、二言目には「昔はよかった。給料も高く、女も囲えたもんだ」が口癖だった。後者は小柄だが、とても 84 歳とは思えない頑健な肉体の持ち主で、彼のことは本文でも詳しく触れている。

私は肉体的には年齢相応である。軽い脳梗塞も患い糖尿病、高血圧の薬も毎日欠かさず飲んでいる。丈夫とは言えないが、虚弱でもない。

人は何歳まで働けるのだろうか。そんなことをふと考えることがある。

というのも、親しい同僚に、85 歳までパチンコ店勤務を続けた人がいるからだ。

パチンコ店の交通誘導員は、お店の立地によって勤務状況は違ってくる。私が派遣されていたパチンコ店は、建物の中に駐車場があった。入り口前には自転車も走れる広い歩道があり、その先が車道だった。

交通誘導員は駐車場入り口の前に立って、歩行者や自転車と車庫に入るクルマの接触事故を防ぐことが第一の仕事である。一日 9 時間、そのうち休憩の 1 時間以外はそこに立つ。パチンコ店には事務室があって、店員は監視カメラの映像をモニターでチェックできる。

つまり、警備員が疲れたからと手抜きをしたり、いい加減な仕事をしたりすればすぐわかる。そのため店員に注意されることもある。気が抜けない。まあ、それより何より、一日 8 時間も立ち仕事をすれば疲れる。

店は海岸近くにあり、冬など風の強い日は防寒着を着ても寒さに震えあがる。夏は周囲に陽を遮る高い建物がないので、とにかく暑い。簡単そうな仕事に見えるが体力を消耗する。

それを 85 歳になる同僚の加地矢は、もう 4 年も続けている。そればかりか決して手を抜かない仕事ぶりは、周囲の誰もが認めるところで店側の信頼も厚い。彼は非常に小柄だが、いつも背筋を伸ばし動作もきびきびしている。

加地矢は幼いときに父親を亡くして、中学校卒業後、左官職人になった。面倒を見てくれることになった人が左官職人だったからだ。修業後に加地矢は親方となり、一時は職人を 80 人も使うようになった。最盛期には月給 250 万円を得て大きな屋敷を構えるまでになった。

ところが、人生は何があるかわからない。同業者 2 人から懇願されて、3 億円もの借り入れの連帯保証人になったのが運の尽きであった。案の定というべきか、彼らは借入金を返済できず、1 人は自殺してしまった。

上番じょうばん 勤務につくこと
下番かばん 勤務を終えること

私が本を書くにあたって最も注意したことは、まさに「自慢話と他人の悪口の羅列」と読者に受け取られることである。これは編集者にもくどいほど念を押して、原稿チェックをしてもらった。

警備員の 9 割は真面目に働く人ばかりであることは、重々承知している。ただしそんな姿ばかりを書き込んでも読者は面白くもないし、また警備員の仕事の本質が

浮かび上がってこないの、いささか極端なケースも書いた。

これだけメディアにも取り上げられた割には、本の記事内容に関するクレームは全くなかったことは特筆してよいかもしれない。

とはいえ、40歳前後の警備員同士が結婚した例を2組知っている。普通に働いていれば、警備員は月に**せいぜい20万円**くらいしか稼げないが、夫婦になれば収入は倍になるのだから、そんなに悪い話ではない。

クルマと自転車が接触しそうになったシーンは、全くなかった。九条は「私も、柏さんが普段からちゃんとやっていることは知っていますが、でも気を付けてください」と言って、店内に戻っていった。

自己正当化するつもりはないが、この客は、負けた腹いせで事実を針小棒大にして、店員に怒りをぶつけたのではないだろうか。

というのも、近くのコンビニの店員から、明らかに**パチンコで負けたと思しき客が、些細なことで店員を怒鳴りつけることが多い**と聞かされていたからである。

また、親しくなった店の清掃員によると、新入りの清掃員に自転車置場の前で、仕事の段取りを丁寧に教えていたところ、遠くからそれを見ていた女性客が、店員に「あの清掃員2人は油を売っていて、全然仕事をしていない」と告げ口をしたそうである。全く余計なお世話だと、清掃員は憤慨していた。

客のクレームには正当なものもあるが、時にはこんな理不尽なものもある。警備業はサービス業と研修でも教わったが、時と場合によっては**2、3日気分が落ち込むことがある**。

というのも「交通誘導員」の本が売れたのは、**類書がないこと、さらに高齢労働者が働かなくてはならない悲哀と社会背景があったから**だと分析している

『ヨレヨレ日記』の売り上げがピークの頃、交通誘導員歴が15年もある一人から、「面白かったから次も出してほしい。ネタは私がたくさん持っているから協力しよう」と出版社宛に電話があった。

私はこれにも、丁重に断りを入れた。**他人の体験を書いてもあまり意味はない**。その上、もし出せたとしても、印税の配分などで「こんなはずじゃなかった」などと、揉めることも予想される。

結局、ハローワークで紹介されたのが**施設警備員**だった。堀田さんは「田舎の博物館で日がなボーッと立っている警備員」の姿をイメージしたのである。

これが大違いだったことは、勤務先に配属させられて嫌と言うほど痛感することになる。場所は東京・港区の45階建ての高層ビルだった。

先輩警備員10人とシフトを組んでの25時間勤務である。警備員は防災センターに詰める以外は、「巡回」と「立哨」がある。**巡回といえど、1日10キロほど歩く**というからハードである。

2021年の5月20日、NHKの「ラジオ深夜便」の収録でNHK放送センターに出かけた。この日は私の75歳の誕生日である。月並みな感想だが、まさにあつという間にこの齢になった。

ラジオ深夜便のテーマは「高齢者の働き方」である。この場合、高齢者にとって健康は第一ある。今後、私は健康保険も後期高齢者になり、1割負担になる。

余談だがこれは助かった。というのも6月、7月と**白内障手術**を行ったからだ。前々から左目が白内障で、手術を受けなければならなかったのだが、糖尿病がある

ので先延ばしにしていた。だが、とうとう右目もひどいことになって、病院へ行ったら即手術を言い渡された。

ひどいことというのは、右目の視力低下のみならず、涙目になり文字が滲んでしまうのだ。医者に聞くと、今の日本では完全に目が白濁するほどの状態になってやってくる患者はそうはいないそうだが、もう限界である。

手術費用は案外高く、1割負担でも片目1万5000円ずつで、計3万円。3割負担なら9万円になる。その後、眼底出血の跡もあるのでレーザー手術を両眼で4回手術を受け、およそ2万円ほどかかった。トータル5万円ほどで済んだが、さっそく「後期高齢者」保険の恩恵に浴したことになる。

大阪のラジオに出演したと

きは、新幹線グリーン車の往復とホテルやタクシー代は頂いたが、**出演料はなし**であった。テレビも何回か出演したが、一度3万円もらったこともあった。

あとがき

トータル5年前後の交通誘導員生活を振り返ると、さまざまな思いが込み上げてくる。とにかく**66歳になって始めた仕事**なので、やる気はあっても若い人のように俊敏に体も動かない。仕事の覚えも悪い。

自分は出版人として生きてきたという変なプライドはなかったが、人として心ない行為をされれば面白くないこともあった。

たった1日でも下手な人、合わない人と組めば疲れるし、自分の身が危険になることもある。だから理性より感情が先立つのも無理はない。そう考えると、**人間の地金がすぐ見えてくる**のも当然だろう。

高齢になって交通誘導の仕事をするには、そうラクなことではない。若いときならなんでもないことが、ストレスになる。

それもこれも、**生活のためでありカネのため**である。『75歳、交通誘導員はまだ引退できません』というタイトルは編集者が考えたものだが、言い得ている。

後期高齢者の私が働く理由は、生きがいでもなんでもない。現実的に差し迫った問題なのである。

ともかくも、私にはまたとない**人間修行の場**であったことは確かだ。この年齢でそんな甘いことを言うのもめでたいが、偽らざる気持ちである。

柏 耕一

75歳、

交通誘導員

まだまだ引退できません

